

会員研究

太田南畝の石碑に残された仇討ち秘話

高尾 隆

仇討ちは誰にでも許されることではなかった

忠臣蔵に代表される仇討ちは、その顛末に人間の恨みや辛み・愛憎がからみ、当時の人々にも必要以上の興味を抱かせたようだ。それが平和な時代であればなおさらである。歌舞伎や物語にされた仇討ちは江戸の中頃から頻発する。語り継がれている事件のほとんどが武家社会を舞台にしているが、人ならば身分に関わりなく同じようなことが起りうることである。ではなぜ侍の仇討ちばかりが記録に残っているのだろうか。そこには社会秩序を守るといふ幕府の思惑があった。武士の本分を尊ぶこと。鎌倉時代の曾我兄弟の仇討ちも有名だが、ここでは江戸時代の歴史をなぞらせていただく。

江戸時代、仇討ちをするのに条件が定められていた。その絶対的な条件は身分が武士に限られてい

ることだった。しかも誰の仇を討つのかというと、その対象が主人や親といった目上の主従関係にある者で、子供や妻が殺されたことで仇を討つことは許されなかった。しかも藩主や公儀に願ひ出て許された者だけが認められた。武士の面目を保つために28年の時をかけ、しかも事件当時3歳と5歳だった遺児が成人した後に果たすという気の遠くなるような話も残っている（元禄14年亀山の仇討ち）。

それでは前述したように、武家ではない者の仇討ちの記録は残っているのか。あるにはあるが詳細が残されていない。そもそも江戸時代の治安はいまのような充実した警察力に護られてはいない。公にはその数は少なく、訴え出られなくても対応できないのが現状だった。だからその道理のいかんに関わらず仇討ちが流行ってもらって

は困るのである。



太田南畝

江戸の世相を狂歌で切った男

江戸後期、御家人の立場にもかかわらず文人狂歌師として知られる太田南畝がいた。蜀山人の別号を持ちその才能は多くの文人墨客に影響を与え、天明狂歌の大流行を起す。しかし南畝によつて認められ世に出た山東京伝などが寛政の改革の厳しい取締りに遭つたため、社会批判につながる狂歌の筆を置く。しかしその後、頭脳明晰な南畝は松平定信が創設した成績優秀な者が選ばれる昌平坂学問所の学問吟味を首席で合格する。この時もう一人合格したのが通商を求めて長崎にやってきた露国のレザノフと対峙する名奉行遠山景晋である。一躍クローズアップされた南畝は、低い家格の出であり

ながらも武家としての出世の道が開かれ、支配勘定として大坂銅座へ赴任する。

大坂時代は再び創作活動を始め、木村兼葭堂や上田秋成といった文化人との交流を持った。江戸に戻つてからの化政時代は、新梅屋敷（現在の向島百花園）などで画家の鋏形恵斎、書家の亀田鵬斎、漢詩人の大窪詩佛ら文人達と粋でおしゃれな遊びを楽しんだことは良く知られる。

それでは太田南畝とはどういう性質の人だったのか。まず普段着の南畝には幕府のお堅い役人のイメージはない。文人仲間と酒を酌み交わし世の中の矛盾やばかばかしいことを狂歌に詠むことを生き甲斐とする。おそらく役人仕事は好きではなく、自分の立場も斜に構えて眺めていたようである。

南武線の谷保（やほ、本来はやほと読むらしい）という所に湯島亀戸と並ぶ江戸の三大天神と呼ばれる谷保天満宮がある。江戸時代は有名な神社において参詣者集めに、よそから神様や仏様を呼んできて出開帳（でがいちよう）というイベントを行っていた。南畝は目白で谷保天満宮の祭神（菅原道

真)を呼んで出開帳を開いていることに皮肉を込めてこう詠んでいる。「神ならば出雲の国に行くべきに目白で開帳やぼのてんじん」。この洒落から後々野暮な話を「野暮天」と言うようになったという。

農民同士のいさかいから生まれた 仇討ち

本題に入ろう。そんな太田南畝が神楽坂で起きたある仇討ちを、後世に残すため石碑に記したという話である。もちろん御上が認める武士の仇討ちというようなことではない。その事件のあらまはこうである。

下総の百姓富吉の父庄蔵は、同じ村の百姓組頭の男と口論になり、暴行を受けて殺される。相手の男は逃亡する。12歳だった富吉は父の仇討ちを決意、田畑を弟に譲り江戸に出る。富吉は神道無念流の剣術家の下僕になり、道場へ入り一心不乱に稽古に励み腕を磨いた。そして父が殺されてから16年ようやく神楽坂で仇を見つけた富吉は、行元寺境内に追い詰めた、見事仇を討つ。居合わせた人々の喝さいを浴び、この話はすぐさ

ま江戸庶民の話題となり実録本にもなった。

この事件の三十三回忌の折、當時寺近くの牛込に住んでいた南畝に任職が碑文を依頼した。寺を舞台に話題となった事件を風化させないためか、顕彰碑で参詣者を増やすためなのかどうかかわからない。南畝にすると立場は武家であり、まともに記したのでは仇討ちの礼賛となりよろしくないのである。そこで一計を案じ、事件の内容を隠語に納めた。その石碑がいまも残っている。

神楽坂といえば武家屋敷が建ち並び、いまのような賑やかな場所ではなかった。行元寺は善国寺毘沙門天の向かい側にあつたがいまはなく、明治の終わりに区画整理で西五反田に移った。東急目黒線の不動駅を出てかむろ坂を200m程行った右手にある。短い参道を進み入口の右手前に石碑は立っている。

石碑の表には「念彼観音力 還著於本人」とある。観音菩薩の力を念ずれば かえって自分に報いをうけるという意味である。後ろ側を見ると

癸卯天明陽月八 二人不戴九人誰



石碑表面



石碑裏面

同有下田十一口 湛乎無水納無絲
南畝子 願主 休心
読んでみよう。

「癸卯天明陽月八」は天明三年十月八日。

「二人不戴九人誰」。ここからが謎解きになる。二人は「二」と「人」を一つの文字にして「天」。「人」(にんべん)に「九」で「仇」。すなわち「天を戴かざる仇は誰か」という問いになる。

次に同有下田十一口は「同」の下に「田」で「富」、「十一」に「口」

で「吉」。
湛乎無水納無絲は「水(さんずい)のない「湛」、「絲(いとへん)のない「納」で「内」
これは富吉が甚内を討つの意味となる。
最後は「太田南畝 安心を願う」と結んでいる。

この石碑も南畝がこう記したお蔭で200年経っても風化せずに好事家の来訪が後を絶たない。では南畝は自分の死に対して何を残したか。辞世の句は「今までは人のことだと思ふたに俺が死ぬとはこいつはたまらん」とある。この飾らない機知が江戸っ子に愛されたに違いない。

